九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Larson(1988)の二重目的語構文分析の意義と問題点

楊, 郭
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/24480

出版情報：九州大学言語学論集. 32, pp.117-130, 2011. Department of Linguistics, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Larson (1988)の二重目的語構文分析の意義と問題点

郭　楊
（九州大学大学院）
kiminoyou@yahoo.co.jp

キーワード：二重目的語文、内在格、構造格

1.研究目的

生成文法の枠組みにおける研究では、格理論の仮定によって、様々な構文が分析されてきた。その中で、今日でも、まだその分析についてさまざまな意見があるのが、目的語が２つある二重目的語文である。本論文では、その端緒となった Larson (1988)の分析をあらためて紹介し、その問題点をまとめ、今後の研究の足がかりとする。

2.Larson (1988)で扱っている現象

英語の３項動詞は、次のように２種類の語順が可能な場合がある。

(1) a. John sent [Mary]$_{Goal}$ [a letter]$_{Theme}$.
b. I promised [Felix]$_{Goal}$ [a new set of golf clubs]$_{Theme}$.
[Larson (1988): p.335 (1)]

(2) a. John send [a letter]$_{Theme}$ [to Mary]$_{Goal}$.
b. Mary took [Felix]$_{Theme}$ [to task]$_{Goal}$.
[Larson (1988): p.335 (2b)]

(1)の二重目的語構文において、動詞に直接後続する目的語の意味役割は Goal であり、２番目の目的語の意味役割は Theme である。一方(2)は、動詞に直接後続する目的語の意味役割は Theme であり、2 番目の目的語の意味役割は Goal である。

Larson (1988) では、同じ D 構造 ― [[V+Goal]+Theme] または [Theme+[V+Goal]]、つまり動詞に最も近い位置あるのはいずれにしても

GoalのNPであり、動詞にとってより遠い位置にあるのは必ずThemeのNPであるというD構造から、(1)と(2)の２つの語順が派生する分析が提案されている。以下では、(1)を直接与格二重目的語文、(2)を間接与格二重目的語文と呼び、それぞれの構文に対するLarson (1988)の分析を紹介する[1]。

2.1.直接与格二重目的語文における非対称性

直接与格二重目的語文について、(3)-(8)に挙げられているような非対称性が Barss and Lasnik (1986)によって報告されている。

再帰代名詞は、LF において、先行詞に c-command されなければならないことが知られており、(3a,b)のような対立が観察される。

(3) 再帰代名詞

a. I showed [Mary]$_{Goal}$ [herself]$_{Theme}$.

b. *I showed [herself]$_{Goal}$ [Mary]$_{Theme}$. [Larson (1988): p.336 (3)]

このことは、直接与格二重目的語文では、Goal の NP が Theme の NP を c-command しているが、Theme の NP は Goal の NP を c-command していないと考えると説明できる。

また、束縛変項解釈は、代名詞が量化表現に c-command されているときにのみ可能である。そして、この場合も(4)のような対立がある。

(4) 束縛変項解釈

a. I gave [every worker]$_{Goal}$ [his paycheck]$_{Theme}$.

b. *I give [its owner]$_{Goal}$ [every paycheck]$_{Theme}$.

[Larson (1988): p.336 (3)]

これも、直接与格二重目的語文では、Goal の NP が Theme の NP を c-command しているが、Theme の NP は Goal の NP を c-command していないことを示している。

以下、現象は異なるが、構造関係はすべて同一である。たとえば、D 構造において束縛代名詞を含む NP に c-command される WH-phrase がその

---

[1] Larson (1988)では、(1)の構文はdouble object construction、(2)の構文はoblique dative structureと呼ばれている。

NP を越えて移動してはいけないことが知られている。確かに、Goal の NP を wh 移動することはできるが、Theme の NP を wh 移動することは許されない。

(5) weak crossover effect

a. [Which man$_i$]$_{Goal}$ did you send [his$_i$ paycheck]$_{Theme}$?

b. *[Whose pay$_i$]$_{Theme}$ did you send [his mother$_i$]$_{Goal}$?

[Larson (1988): p.336 (3)]

(5)の Goal の NP は D 構造において、Theme の NP を c-command しているため、wh 移動が許されている。逆に、Theme の NP は Goal の NP に c-command されているため、wh 移動が許されない。

また、多重 wh 疑問文では、D 構造において他方を c-command している方の wh 句が顕在移動をするとされており、Goal の wh 句が文頭にあらわれた文は許されるが、Theme の wh 句が文頭にあらわれた文は許されない。

(6) superiority effects

a. [Who]$_{Goal}$ did you give [which paycheck]$_{Theme}$?

b. *[Which paycheck]$_{Theme}$ did you give [who]$_{Goal}$?

[Larson (1988): p.337 (3)]

(6)も(5)同様、D 構造において、Goal の NP が Theme の NP を c-command していることが推論できる。

さらに、each と the other が「互い」という読みを出すためには、each-phrase が the other-phrase を LF において、c-command しなければならないが、その対立も予想通りである。

(7) each... the other

a. I showed [each man]$_{Goal}$ [the other's socks]$_{Theme}$.

b. *I showed [the other's friend]$_{Goal}$ [each man]$_{Theme}$.

[Larson (1988): p.337 (3)]

ここもやはり、直接二重目的語文の Goal の NP が Theme の NP を c-command しているが、Theme の NP は Goal の NP を c-command していないと考えられる。

最後に、直接二重目的語文の LF において、否定極性項目は否定辞あるいは否定量化詞に c-command されなければならず、ここでも予想通りの対立が観察される。

(8) negative polarity items

a. I showed [no one]$_{Goal}$ [anything]$_{Theme}$.

b. *I showed [anyone]$_{Goal}$ [nothing]$_{Theme}$. [Larson (1988): p.337 (3)]

このように、(3)-(8)が示しているのは、直接与格二重目的語文において、Goal の NP が Theme の NP を c-command していると考える必要があるということである。

2.2.間接与格二重目的語文における非対称性

また、間接与格二重目的語文においては、(3)～(8)と同じ現象を観察することによって、逆に、Theme の NP が Goal の PP を c-command しているという結果が出る。

(9) 再帰代名詞

a. I presented/ showed [Mary]$_{Theme}$ [to herself]$_{Goal}$.

b. *I presented/ showed [herself]$_{Theme}$ [to Mary]$_{Goal}$.

[Larson (1988): p.338 (5)]

(10) 束縛変項解釈

a. I gave/ sent [every check]$_{Theme}$ [to its owner]$_{Goal}$.

b. ??I gave/ sent [his paycheck]$_{Theme}$ [to every worker]$_{Goal}$

[Larson (1988): p.338 (5)]

(11) weak crossover effect

a. [Which check]$_{Theme}$ did you send [to its owner]$_{Goal}$?

b. *[Which worker]$_{Goal}$ did you send [his check to]$_{Theme}$?

[Larson (1988): p.338 (5)]

(12) superiority effects

a. [Which check]$_{Theme}$ did you send [to who]$_{Goal}$?

b. *[Whom]$_{Goal}$ did you send [which check]$_{Theme}$ to?

b.' *[To whom]$_{Goal}$ did you send [which check]$_{Theme}$?)

[Larson (1988): p.338 (5)]

(13) each... the other

a. I sent [each boy]$_{Theme}$ [to the other's parents]$_{Goal}$.

b. *I sent [the other's check]$_{Theme}$ [to each boy]$_{Goal}$.

[Larson (1988): p.338 (5)]

(14) negative polarity items

a. I sent [no presents]$_{Theme}$ [to any of the children]$_{Goal}$.

b. *I sent [any of the packages]$_{Theme}$ [to none of the children]$_{Goal}$.

[Larson (1988): p.338 (5)]

これらの観察は、英語の二重目的語構文の分析が必ず説明しなければならない現象である。

2.3.二重目的語文の受身文における非対称性

さらに、直接与格二重目的語文の受身文においては、(15a)と(15b)のような非対称性も見られる。

(15) a. [Mary]$_{Goal}$ was sent [a letter]$_{Theme}$.

b. ?*[A letter]$_{Theme}$ was sent [Mary]$_{Goal}$.

[Larson (1988): p.351 (39a)(41)]

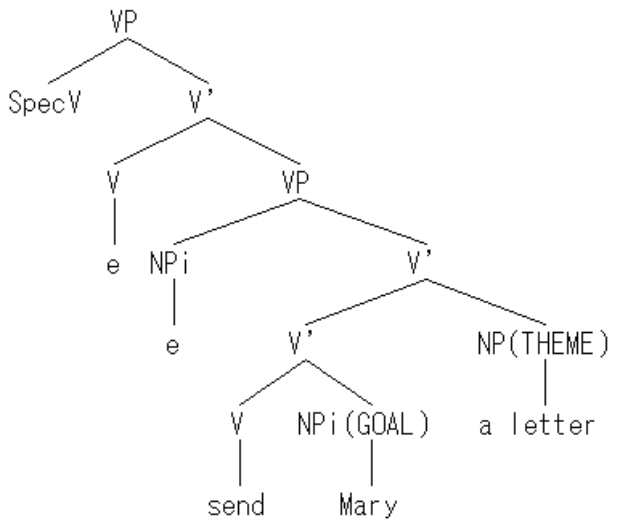
(15)が示しているのは、直接与格二重目的語文が受身に変わる際に、Goal の NP についての受身文はできるものの、Theme の NP についての受身文はできないということである。

3.Larson (1988)の分析

3.1.直接与格二重目的語文の構造

まず、直接与格二重目的語文の D 構造については、Larson (1988)は、次のような構造を提案している。

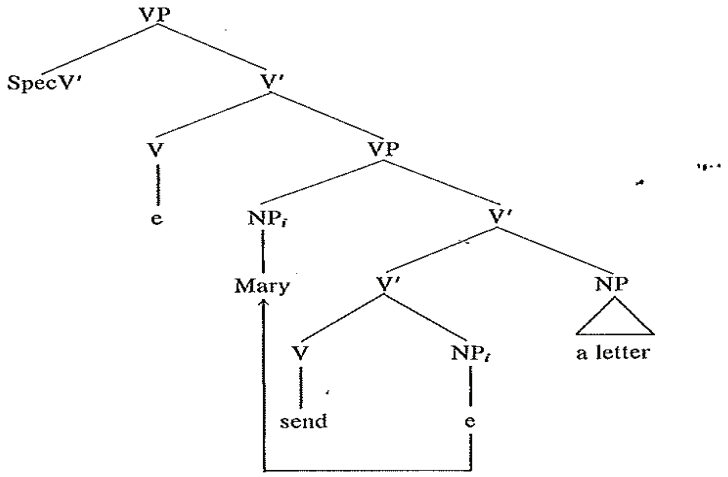
(16) 直接与格二重目的語文の D 構造



(16)のように、直接与格二重目的語文の D 構造において、動詞に最も近い位置にあるのは GOAL の NP であり、その次は THEME の NP である。

(16)の D 構造の上、Larson (1988)によって考えられたのは、Dative Shift と呼ばれる移動である。

(17) Dative Shift



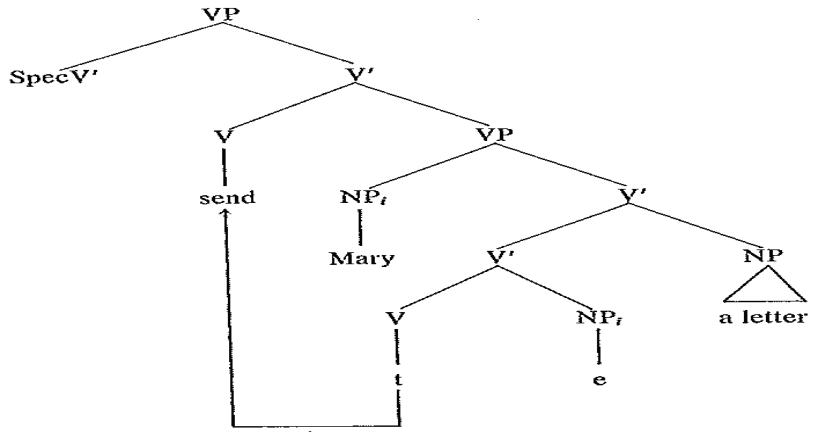
[Larson (1988): p.353 (25)]

Larson (1988)は二重目的語文をまず(16)のように、VP を２つ設定する構造と考えている。ところが、(16)のままでは、Theme の NP が Goal の NP を

c-command してしまい、(3)の非対称性が解決できなくなるため、(17)ではもとの位置で Case をもらえない Goal の NP が e の場所から上に空いている VP Spec に移動する。Larson (1988)は、この移動のことを NP-movement と区別するために、Dative Shift と呼んでいる。

そして、Dative Shift だけでは、Case の付与が完了しないため、次の移動が考えられた。

(18) V Raising



[Larson (1988): p.353 (26)]

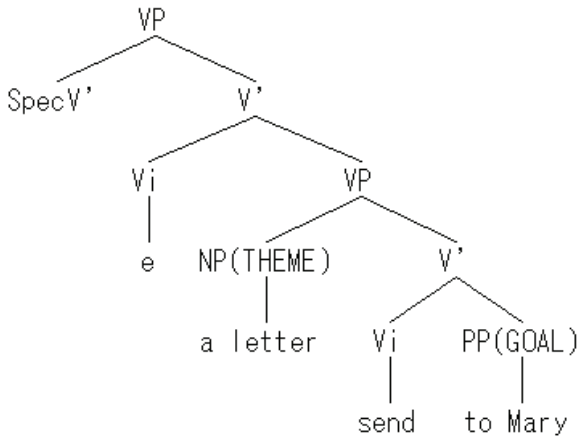
(17)の Dative Shift が終わったところで、動詞の send が INFL に govern されない位置に置かれるので、send が Goal の Mary に Case を付与できなくなる。そのため、なんらかの移動が考えられる。この移動を実現させたのは、やはり VP を２つ設定する構造である。つまり、「最初の VP の sister 位置を空にしておくこと」によって、動詞 send の移動先が用意されている。このように、INFL に govern されない動詞 send が VP の sister の位置に移動し、隣接する目的語に構造格を付与する。この動詞の移動は V Raising と呼ばれている。

更に、Theme の a letter の格付与について、Larson (1988)は新たな仮定をした。Larson (1988)は、「他動詞は内項に常に二回格付与している。一回は構造格を与え、もう一回は他動詞の語彙特性による内在格を与える。ただし、内在格は D 構造において、他動詞を含む VP 内の最も位置の高い NP にしか付与しない」と述べている。この仮定によって、(17)の Theme の a letter は send の元位置 *t* と Mary の元位置 e を含む VP 内で最も上にある NP なので、send に内在格を付与されることになる。

3.2.間接与格二重目的語文の構造

Larson (1988)は、間接与格二重目的語文の D 構造を(20)のように仮定している。

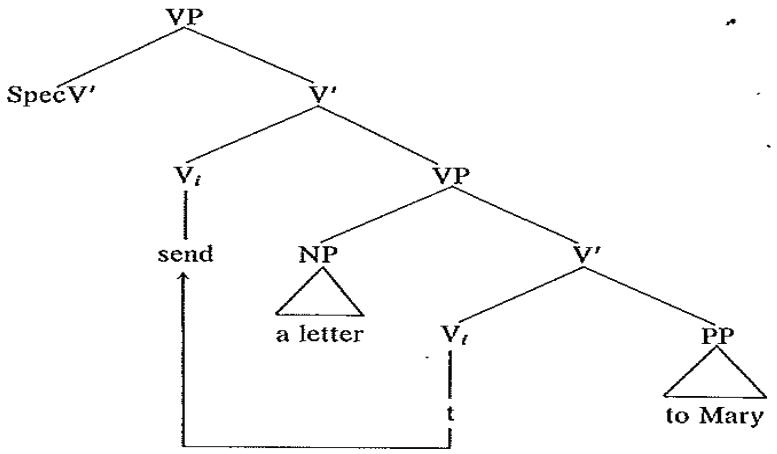
(19) 間接与格二重目的語文の D 構造



(19)の間接与格二重目的語文の D 構造は(16)の直接与格二重目的語文の D 構造と同じように、VP を２つ設定する構造である。

(19)のままでは、格付与が終わらないため、次に V Raising が仮定された。

(20) V Raising



[Larson (1988): p.343 (14)]

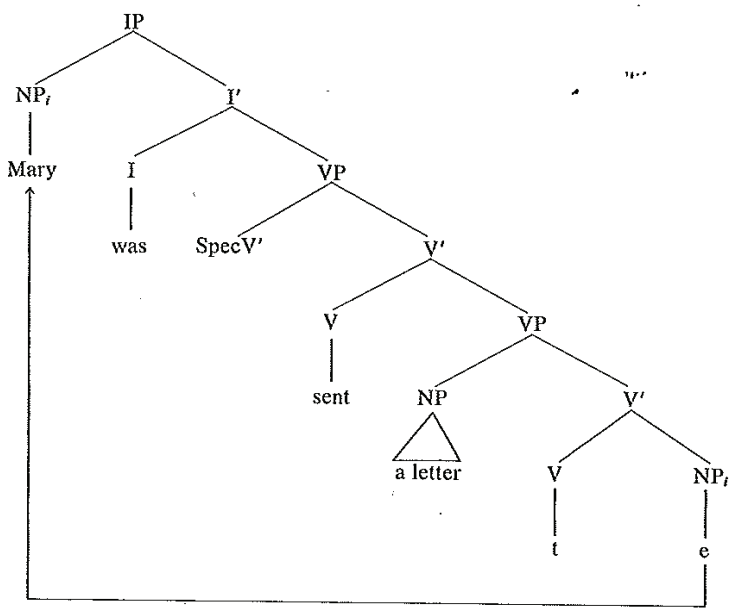
Larson (1988)によれば、send がもとの位置では、INFL に govern されていないため、Theme の a letter に構造格を付与することができない。よって、VP

の sister の位置に V Raising する。そのため、V Raising してから send が Theme の a letter に構造格を付与する。同時に、D 構造において、Theme の a letter は send の元位置 *t* を含む VP 内で最も上にある NP なので、send から内在格も付与される。そして、Goal の Mary は P の to から Case を付与される。

3.3.直接与格二重目的語文の受身文の構造

Larson (1988)における直接与格二重目的語文の D 構造は(17)のとおりであるが、この文の受身文の構造は、(21)のようになっていると仮定されている。

(21)



[Larson (1988): p.363 (40)]

従来の分析に従えば、V が受身形になると、目的語に Case を付与することと、主語に θ -role を付与することが同時にできなくなる。よって、sent が V Raising しても、(21)の場合、元の位置にある Mary に構造格を付与することができない。ところが、IP Spec の位置は、INFL によって、格付与される位置なので、構造格を付与されない Goal の Mary が(21)のように、IP Spec の位置に移動すると仮定されている。

さらに、Larson (1988)によれば、直接与格二重目的語文の受身文の構造を(21)のように仮定すれば、何故(15b)が容認不可能なのかも説明できるというのである。(15b)における Theme の a letter は、もとの位置で sent に内

在格を付与され、且つθ-role も付与されているので、NP-movement をする動機がなくなり、主語位置に移動しないと Larson (1988)は述べている。

3.4.Larson (1988)の主張のまとめ

Larson (1988)が分析で用いていた仮定を以下に列挙しておく。

まず､直接与格二重目的語文と間接与格二重目的語文の D 構造について、Larson (1988)は次のような仮定をしている。

(22) 直接与格二重目的語文の D 構造は[VP e [VP e [v' send Mary] a letter]]]になっている。

(23) 間接与格二重目的語文の D 構造は[VP e [v' e [VP a letter [V' send [PP to Mary]]]]]となっている。

ここで、(22)と(23)の D 構造は(24)の仮定を前提にしている。

(24) 直接与格二重目的語文と間接与格二重目的語文には VP が２つある。（さらに、最初の VP の sister 位置は空でなければならない。）

さらに、Case filter の問題を解決するために、次の仮定が提案された。

(25) 他動詞は内項に常に二回格付与をしている。一回は構造格を与え、もう一回は他動詞の語彙特性による内在格を与える。ただし、内在格は、D 構造において、他動詞を含む VP 内の最も位置の高い NP にしか付与しない。 [Larson (1988): p.360]

(26) V の抽象格は全て NP に対して放出（discharge）されなければならない。

最後に、Larson (1988)の提案ではないが、Larson (1988)で用いられている格理論の前提を挙げておく。

(27) V が INFL に govern されなければ、NP に Case をすることが付与できなくなる。

(28)　V が目的語の NP と隣接していなければ、構造格を付与することができない。

本論文の残りの部分では、これらの仮定の上に立った分析の問題点を指摘する。

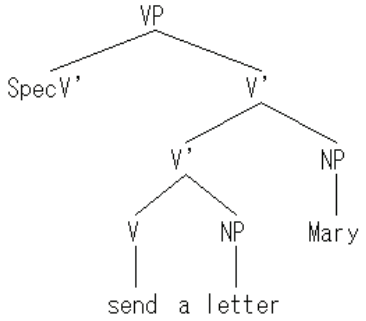
4.Larson (1988)の問題点

4.1.VP を２つ設定する問題

(24)の仮定は Larson (1988)が二重目的語文の格付与を説明する際の前提になっている。確かに、直接与格二重目的語文が(18)であると仮定すると、(27),(28)の格理論の制約を満たすためには、V Raising と呼ばれる移動が必要となり、Larson (1988)が目指した語順が正しく派生されることになる。しかし、問題は、どのようにして、「必ず VP が２つなければならない」ということを保障するかということである。Larson (1988)の分析を成立させるためには、VP が１つしかない D 構造が何らかの制約に違反し、VP が２つある D 構造が強制されなければならないはずである。

(29) a.　John sent　Mary$_{Goal}$　a letter$_{Theme}$.　[Larson (1988): p.335(1)]

b.



ところが、(29)の構造では、send が INFL に govern されているので、隣接する目的語の a letter に構造格を付与することができる。さらに、Goal の Mary は send を含む VP 内で最も高い位置にある NP なので、send によって内在格を付与される。これで、格理論は満たされ、(29b)の構造は文法的ということになってしまう。しかし、(29b)の語順は、英語として許されないものであり、Larson (1988)の分析がここで破綻するのである。

このように、Larson (1988)の分析では、(24)を仮定しない限り、この派生を排除することができないが、(24)の仮定は、制約とは言えないものであ

り、また語彙特性と考えるのも無理がある。Larson (1988)においては、上のような派生の可能性について、まったく見落とされているのである。

4.2.格付与の問題

そもそも、何故他動詞が常に構造格と内在格の２つを付与しなければならないのかについて、Larson (1988)では明示的な理由が述べられていない。二重目的語文のような、目的語が２つある場合の格付与が、移動でしか解決できないことはないと考えられる。つまり、移動を考えずに、Theme と Goal の２つの項を取れる他動詞が Case を１つ付与するのではなく、２つ付与する語彙特性を持っていると仮定すれば､従来言われている Case Filter に違反せず、二重目的語文の構造が説明できる。そうすれば、不要な移動も仮定せずに済むし、目的語が１つしかない文の目的語が、二回 Case を付与されるという本来考えにくいことも避けられる。

4.3.二重目的語文の受身文の問題点

Larson (1988)の仮定において、二重目的語文の受身文の構造(21)と通常語順の文の構造(18)を見比べれば分かるように、Theme の a letter の位置が変わっている。(18)において、２階の V'の目的語位置にある a letter が、(21)においては、２階の V'の Spec の位置に変わっている。何故このような違いが生じるのか、Larson (1988)には理由が挙げられていない。

5.今後の研究に向けて

日本語のような格のある言語に比べ、英語や中国語には顕在的な格標識がないため、格付与の仮定は従来からの問題になっている。郭(2009, 2010)等では、中国語の構文について抽象格という概念を用いた分析を提案しているが、抽象格がどのような条件のもとで認可されると考えるべきかが、その重要な課題となっている。Larson (1988)においては、他動詞が常に目的語に構造格と内在格の２つを付与しているという主張が興味深く、この分析は、中国語の以下のような構文の分析にも応用可能なものである。

(30) zhangsan ai lisi
张三 爱 李四。
zhangsan 愛する lisi

张三は李四を愛している。 [郭(2009): p.9 (35)]

ただ、郭(2009)は(30)の他動詞文を分析する際に、他動詞の「愛する」が２つの Case を付与する他動詞であり、それぞれ主語の「张三」と目的語の「李四」に付与していると述べている点において、Larson (1988)の２回格付与と異なる。

中国語の格付与と Larson (1988)で提案されている格付与を比較する必要はあるものの、紙幅上の関係、本研究ノートでは、主に Larson (1988)の問題点を指摘するのみにとどめる。特に、Larson (1988)の分析では 4 節で指摘したような問題が含まれているので、そのことを意識しつつ、今後の分析を行っていく必要があると考えている。

謝辞

本稿の執筆にあたり、上山あゆみ先生から様々なご指摘をいただきました。また、匿名査読者からも貴重なコメントをいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。無論、本稿における議論の不備や誤りの責任は筆者にあります。

参考文献

Barss, Andrew and Howard Lasnik (1986) A Note on Anaphora and Double Objects. *Linguistic Inquiry* 17: 347-354.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Chomsky, Noam (1986b) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA: MIT Press.

Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government and binding theory*. Oxford, UK and Cambridge, Mass: Blackwell Publishers..

Larson, Richard K. (1988) On the Double Object Construction. *Linguistic Inquiry* 19: 335-391.

Stowell, Timothy Angus (1981) Origins of phrase structure. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

郭 楊 (2009)「中国語の de(得)補語文の統語構造」修士論文, 九州大学.

郭 楊 (2010)「中国語の de(得)補語文の統語構造」『九州大学言語学論集』31: 1-20.

Larson's (1988) Analysis of the Double Object Construction Revisited

This paper presents a critical review of the analysis of the double object construction proposed in Larson (1988). The most famous aspect of his analysis is to introduce two sets of VPs in both the direct double object construction and the oblique dative construction. However, I have shown that his analysis cannot exclude the derivation of an ungrammatical configuration, unless he makes several unnatural assumptions. I have also argued that his theory of Case-assignment needs more conceptual basis.

（初稿受理日　2011 年 2 月 28 日　　最終稿受理日　2011 年 7 月 2 日）